

比較文化論 : 大項目別報告 : 神話 4300

著者	大林 太良
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	150-157
発行年	1990-03-10
その他のタイトル	Comparative Analyses : Results : Myth 4300
URL	http://doi.org/10.15021/00003653

神 話 4300

大 林 太 良*

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 天地分離神話 (4301) と羽衣説話 (4310) |
| 2. 天地分離神話 (4301) と地下からの先祖神話 (4305) | |

1. は じ め に

神話に関しては、本共同研究の資料はかなり不充分であって、個々の神話の分布の傾向を明らかにすることがしばしば困難であることを、まず冒頭に指摘しておく必要がある。そのことは、従来の神話の比較研究や、個々の地域の説話集、神話論考などからわれわれが知っている知識に照らしても、はっきりいうことができる。

その理由として考えられることは、何よりも今回の共同研究で資料として用いた個々の民族の民族誌的報告には、神話についての記載に乏しかったり、あるいはまったく欠けていることが少なくないことである。したがって、ある程度信頼できる分布像を手に入れるためには、これら資料のほかにも、説話集などの資料によって補うことが必要であろう。

例をあげよう。射日神話 (4303) については、本資料は9例だけで、そのなかに Murngin のように疑わしい例が入っている。そのあとは、中国本土、台湾、東南アジア大陸部、ボルネオ、フィリピンに散在している。しかし、われわれに従来の研究 (たとえば、[岡 1979: 159-168; 荒木 1973]) から、射日神話が中国南部に多く、かつ西部インドネシアの一部にも分布しており、全体的にはるかに濃密な分布をもっていることを知っている。したがって、現在の本共同研究のサンプルでは分布像を明らかにするのに不十分なのである。兄妹始祖型洪水神話 (4304) についても、従来の研究 (たとえば [WALK 1949]) から、われわれにインドシナやインドネシアにもっと多く分布していることを知っているが、その分布が本資料ではあまりよく出

* 東京大学教養学部

ていないのである。さらに火盗み神話(4307)が、メラネシアやオーストラリアに多数あることは、フレーザー(Frazer, J.G.)の集成[フレーザー 1981: 15-86]をみても明らかであるが、本資料では事例があまりにも貧弱なのである。

このように、本共同研究の資料は不完全ではあるものの、それでも、すでに若干の所見が可能な項目がある。その一つは、地域的、あるいは語族的に偏った分布をなす神話形式の存在することである。たとえば、作物死体化生神話(4309)は、アッサムのLakherに、あまりパッとしない事例があるものの、あとの13例はすべて島嶼部に分布し、Lakherがチベット=ビルマ語族に属し、KimamとYimarがパプア語族に属するほかは、すべてオーストロネシア語族に属している。また、失われた釣りばり伝説(4311)も、ほとんどインドネシアのものである。本サンプルの9例は、Lauを除けば、語族的にはすべてヘスペロネシア語派に属しているのである。この2神話は、従来の研究によって知られている分布状態(作物死体化生神話[大林 1984b: 175-179])(失われた釣りばり[大林 1979: 170-175; 1985a: 81-85])とくらべても、本サンプルの分布の大勢は大体正しく、かつ、このように地域的、語族的な偏りが認められるのである。

つぎに、このサンプルにおいて、分布状態がいちじるしく食い違っている2神話の場合を二つ取り上げて、簡単な考察を試みたい。

2. 天地分離神話(4301)と地下からの先祖神話(4305)

中国南部・東南アジアからオセアニアにかけてひろい分布をもちながら、しかもその分布があまり重複せず、かなり食い違っている神話としては、天地分離神話と地下からの先祖神話がある。もちろん本文化クラスター共同研究会において、今日までに集められた資料は、まだ限られたものであるから、分布の全体像は明らかにされていない。それでも、今日までの資料によってもこれら二つの神話の分布の食い違いは明らかである(図1, 2, 表1)。そして、このような分布の傾向は、従来の研究(天地分離神話[Numazawa 1946])(地下からの祖先神話[大林 1973])で知られている分布の大勢とも矛盾しないのである。

これから、本共同研究のデータに基づいて、若干の考察を加えてみよう。

1) 天地分離神話も地下からの祖先の神話も、ともに大陸部と島嶼部の双方にまたがって分布している。大陸部あるいは島嶼部のいずれかにのみ特徴的な話なのではない。

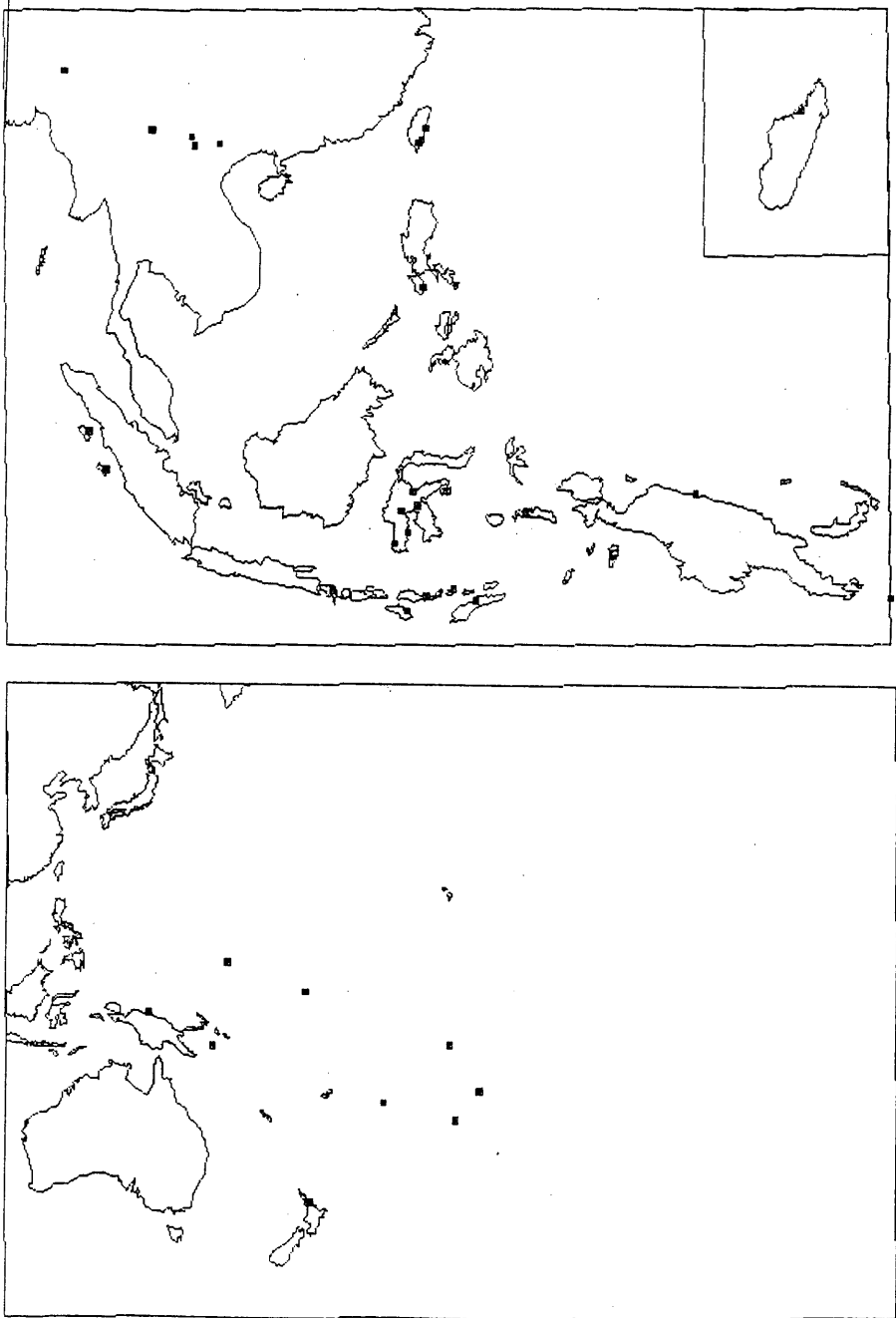


図1 天地分離神話（4301）の分布

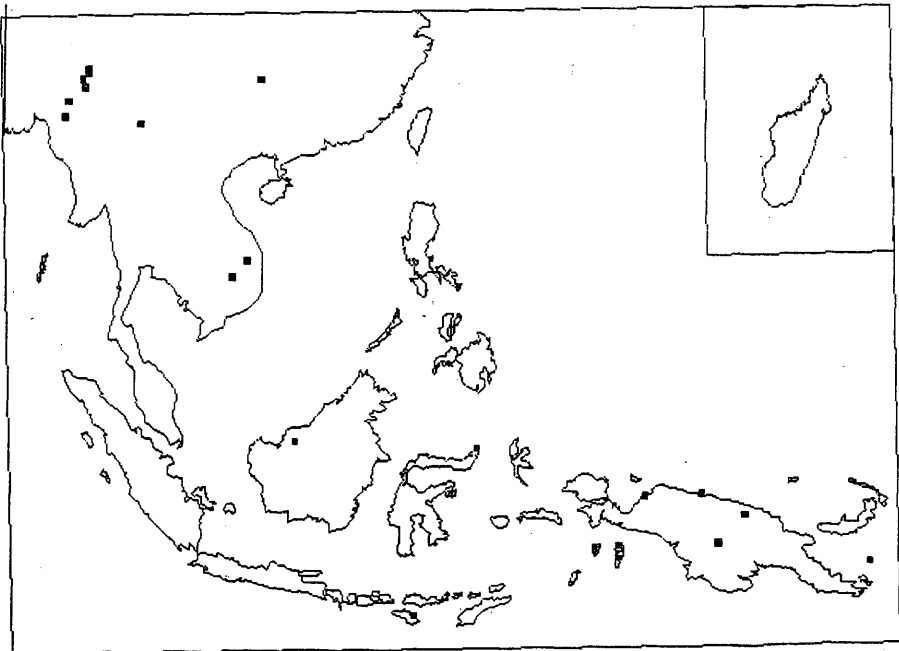
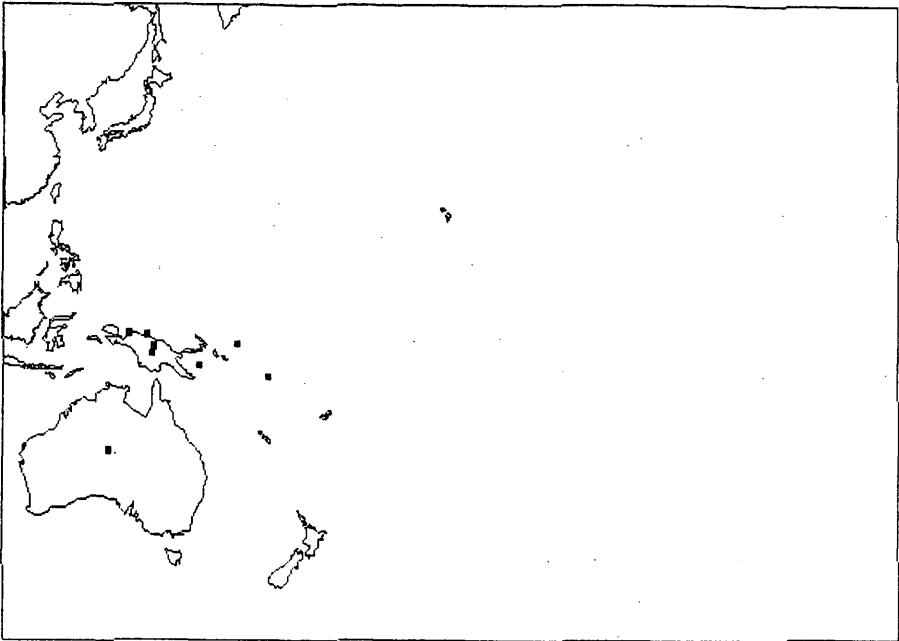


図2 地下からの先祖神話(4305)の分布

表1 天地分離神話(4301)と地下からの先祖神話(4305)の比較

		天 地 分 離 神 話	
		あ り	な し
地下からの先祖神話	あ り	Sumbanese, Sentani (2)	Ao Naga, Angami Naga, Sema Naga, Lakher, Thado-Kuki, Wa, Lushai, 貴州 Miao, Mnong Gar, Jarai, Iban, Minahasa, Alorese, Kei, Santa Cruz, Ontong-Java, Waropen, Seltaman, Yimar, Trobriand, Walbiri (21)
	な し	Sakalava, Khasi, Akha, Black Tai, White Tai, Muong, Nias, Mentawean, Southern Toradja, Eastern Toradja, To Mori, Bugis, Makassarese, Balinese, Endeh, Lio, Kedang, Wemale, Hanunoo, Ami, Paiwan, Puyuma, Gilbert, Ponape, Niue, Society, Southern Cook, Maori, Tongareva, Rossel Islanders (30)	そ の 他

括弧内は、該当する民族数をあらわす。

2) これらの、神話を伝える民族は、いろいろな語族にわかれている。天地分離神話においては、モン=クメール、チベット=ビルマ、ヴェト=ムオン、オーストロネシアの諸語族、地下からの祖先の出現神話は、チベット=ビルマ、ミャオ=ヤオ、モン=クメール、オーストロネシアの諸語族に伝承されている。このことは、作物死体化生神話(4309)や失われた釣りばり神話(4311)が、ほとんどまったくオーストロネシア語族(後者はヘスペロネシア語派)に限定されていて、特定語族との結びつきが強いのとくらべて、注目すべき特徴といえる。ということは、これら二つの神話は、東南アジアに関するかぎりにおいては、本質的には特定の語族の固有文化要素として、語族の移動とともに拡がったというような拡がり方をしたのではなく、むしろ語族の移動とは特別のかかわりなく拡がったものであることを考えしめる。

他方では、オセアニアに限定すれば、語族との関係が認められる。つまり、天地分離神話は、オーストロネシア語族にはひろく分布しているのに反し、パプア語族には欠けていることは、オセアニアに関しては、このモチーフはオーストロネシア語族とともに、あるいはその後には拡がったものであって、パプア語族の段階には、まだ拡がっていなかったことを示唆している。他方、地中からの先祖の神話は、オセアニアでは本質的にはニューギニアとその離島に分布しているが、メラネシア島嶼部ことに南部、ミクロネシア、ポリネシアには欠けている。このことからみて、地中から先祖が

出現した神話は、オセアニアにおけるオーストロネシア語族の大移動とは関係なく、むしろ元来、パプア的なものであったが、二次的にメラネシア語系の若干の諸族のところに拡がったとみることができよう。

3) このような、1)、2)で論じた共通性をもつにもかかわらず、天地分離神話と地下からの先祖出現神話とは、その分布において食い違っており、われわれのサンプルにおいては前者32民族、後者23民族のうち重複しているのは、Sumbanese と Sentani だけである。本共同研究で取り扱われていない民族に関しても、従来の研究からみて、両神話はたがいに相違する分布をもっているが、ここではその問題に立ち入らず、本共同研究資料に議論を限定する。

4) このような分布の相違は、いろいろな解釈が可能である。その一つは、天地分離神話と地中からの祖先出現神話とが、その原理ないし基本的な観念において、相互に対立し、あるいはまた相容れないものであるからだ、という解釈である。

この解釈ももっともなところがある。というのは、天地分離神話で問題になっているのは天と地との交通ないし関係の杜絶である。あるいは近すぎる天と地間の関係の是正であるといってもよい。これにたいして地中からの祖先出現神話では、地下（地中）と地上との関係が問題になっている。そして、一度地下から出現してからは、もう人類は少なくとも生きている間に地中に戻って生活することはないから、地中（地下）と地上との交通の杜絶あるいは、近すぎる地下（地中）と地上との間の関係の是正が含蓄されている。この二つは論理的にはたがいに排除しあうものではなく、相互補完的な関係にあったとしても不思議でない。しかるに、それが分布上、ほとんど重複しないということは、この2神話が二つの相異なった世界観の表現だからであるかもしれない。つまり原古における秩序設定に関しては、天と地の関係をテーマにした天地分離神話は、天的 celestial な指向の世界観、地下と地上との関係をテーマにした地中祖先出現神話は、地的 chthonic な指向の世界観をあらわし、それゆえ、対立的な世界観のために、両神話の分布が異なるのだという解釈が考えられる。

5) 第2の解釈は、歴史的な解釈である。つまり、この二つの神話が、相異なる文化層ないし文化潮流に属しているために、それが相違しているという見方である。この見方にも有利な点がある。つまり、天地分離神話も、地中からの先祖出現神話も、ともに採集狩猟民にはなく、またヒンズー的高文化の代表者のところでも、バリ島民（天地分離神話）のような例外はあるものの、けっして一般的ないし特徴的でない。したがって、この両神話は、主として採集狩猟民文化と高文化の中間の未開農耕民文化に属するとみなしてよい。しかし、共通点はそこまでである。両者の分布が異なっ

ているのであるから、未開農耕民文化として一括される諸文化のなかでも、相異なった文化層ないし文化潮流に属する可能性が考えられる。

その場合、地中からの先祖出現神話のほうが、天地分離神話よりも古い文化層ないし文化潮流に属すると考えることができる。理由は、前者の分布が、アッサム、Wa, モンタニャール諸族、東部インドネシアからニューギニアにかけて、というように僻地であり、また古い文化要素の分布地域でもあるところに集中して分布しているのに反し、後者は、Balineseのような高文化民族をふくむばかりでなく、Khasi, Black Taiのように、比較的新しい文化層に属すると思われる民族もふくむなど、一般的にみて、地中からの祖先出現神話の場合にくらべて、より新しい文化潮流によって広がったという観が強い。

いま述べた二つの可能性は、たがいに排除しあう性格のものでなく、両者が相まって、このような分布状態をしていると解釈するのが、おそらくもっとも適当であろう。

3. 天地分離神話 (4301) と羽衣説話 (4310)

天地分離神話と羽衣神話は、ともに天と地という二つの宇宙領域の間の関係を語っている。しかし、両者の分布は相違しており、本共同研究の今までの資料では、それぞれ32民族と14民族というサンプルのうち、共通しているのは、Mentawean, Southern Toradja と Balinese の三つにすぎない。

羽衣説話の場合も、天地分離神話の場合と同様、大陸部、島嶼部のいずれか一方に分布が局限されることもなく、また、特定の語族にのみ結びついているわけでもない。つまり、チベット=ビルマ、ミャオ=ヤオ、オーストロネシア、パプアの諸語族にわたって分布しているのである(図1, 3, 表2)。

1) このような共通点はあるものの、両者の分布は異なっている。これはある意味からいえば不思議にみえることである。というのは、天地分離神話と地中からの先祖出現神話においては、ともに原古における秩序の設定が問題になっていて、両者が相対する原理ないし世界観をあらかずき場合には、分布の様態を異にすることが予想されるのにたいし、天地分離神話と羽衣説話とに関しては、後者は前者と異なって原古における秩序設定をテーマとしておらず、むしろ前者によって確定した天と地の分離をいわば前提として、その後における天地間の交渉を問題にしているのです。両神話は別に矛盾対立するような性格のものとも思えないからである。

2) ただ、考えられることは、天地分離神話においては、天地間の交通が断絶し

表2 天地分離神話(4301)と羽衣説話(4310)の比較

		天地分離神話	
		あ り	な し
羽衣説話	あり	Mentawaien, Southern Toradja, Balinese (3)	Lakher, Nashi, 湖南 Miao, Moken, Javanese, Tenggerese, Iban, Palau, Pentecost, Waropen, Watut (11)
	なし	Sakalava, Khasi, Akha, Black Tai, White Tai, Muong, Nias, Eastern Toradja, To Mori, Bugis, Makassarese, Sumbanese, Endeh, Lio, Kedang, Wemale, Hanunoo, Ami, Paiwan, Puyuma, Gilbert, Ponape, Niue, Society, Southern Cook, Maori, Tongareva, Rossel Islanders, Sentani (29)	

括弧内は、該当する民族数をあらわす。

たことを強調しているのに対し、羽衣説話の場合は、分離している天地間の交通可能性が表面に出ている。この相違が、両者の相容れない所以かもしれない。

3) しかし、それと同時に、両者の分布の相違が、主として文化的な理由によるものという解釈も可能である。

4) そのさい、注目すべきことは羽衣説話はジャワ・バリ地域にかなり濃密な1分布区があり、ここに一つの中心が存在したと考えられる点が、天地分離神話の場合と異なっている。

5) しかし、そうかといって、羽衣説話がヒンズー的な高文化によってもたらされたとみることはできない。中国南部からニューギニアにおよぶ分布の状態が、そのような解釈に不利である。

6) 本共同研究における資料は、ことに羽衣説話に関して不十分である。たとえば、この地域についての羽衣説話の従来の分布研究 [LESSA 1961: 120-168] と比較すれば、そのことはよくわかる。したがって、資料の現段階においては、これ以上の論議を慎むのが適当であろう。